

自治医科大学創立50年を迎えて～創意と工夫で益々の発展を

自治医科大学名誉教授
東京大学名誉教授
森岡 恭彦



自治医科大学は世界に類をみないユニークな医科大学である。ところで創設されて間もない頃、旧知のフランス人の医師が見学にやって来た。案内していると「自治医科大学の自治とはどういう意味か」と言う。「autonomy」と答えると、彼はにっこりして突然両手を挙げて「オー」といって飛び上がるばかりであった。autonomyはフランス人好みの言葉のようだが、英語に直訳すると本学はAutonomy Medical Schoolというわけである。しかし本学は名前のように近代の大学の最大の関心事である「大学の自治の尊重」ということとは関係がない。たまたま当時の自治省が主体になって創ったというだけのことで、大学の自治を謳ったわけではない。ともかく英語でもユニークな名前の大学である。

名前はともかくとして医科大学としては特異な存在で創設以来本学特有な難問を抱えていた。一般の医科大学では立派な医師や研究者を養成すること、さらに高度の医療の提供、医学の研究を通じ社会に貢献するといったことが医科大学の使命と言えよう。本学でもその基本は不変だが、さらにへき地に働く医師を供給することも目的で、当初から些かの不安もあった。この大学設立の事業を引き受けられた初代学長の中尾喜久先生は先ずはへき地で働く医師の養成というのでレベルの低い医師でよいのではないかという俗な考えに対して警戒感を持たれ、むしろより見識のある立派な医師の養成が必要であることを力説されていた。そのためには他の医科大学に劣らぬ立派な施設、病院、研究所の建設が重要であるとし、また学生教育については全寮制を決めそれにふさわしい学生寮の建設などが行われた。また当時は医学部、医科大学新設ブームで大学のこれはという人物は新設の大学に赴任していたこともあって、教授の候補として40歳そこそこの若い先生が選ばれ私もその一人であった。当時の自治省の意気込みもあって施設もほぼ立派なものが建設され、特に赴任された多くの若い教授やスタッフたちは学生と良く交流し教育にも熱心で大学の創設、運営に尽くしたといえよう。また血気盛りの若い教員を信頼し、仕事を任せて下さった学長の中尾先生のお人柄の賜物でもあった。

しかし本学の特徴である卒業生のへき地勤務には不安もあった。しかし卒業生の活躍は予想以上のものがあって、今日では数多くの卒業生が日本全国各地で働いており、社会的にも高く評価されているといえよう。これには特にへき地に勤務する医師の支援体制とし

て都道府県単位の同窓会の運営、研修・研究助成、彼らの活動を支援する拠点病院、診療所の設立、運営など他大学には見られない特有の対応もなされてきた。そのためには行政の援助もあろうが多くの卒業生の自主的活動の成果であることは特筆される。中でも数多くの病院、診療所の運営は特有で、卒業一期生の吉南通康先生らの活躍、行動力によるものでその一例と言える。

ともあれわが国では生活環境の格差、へき地がなくなるわけではなく、今後も自治医科大学の存在は国としても重要であることに変わりないであろうが、大学として学生、教員の人材確保も重要な課題で、またへき地勤務に関わる難問もありこれには大学、卒業生、また行政が共同して創意と工夫で問題解決に努めることが大切であろう。本学の益々の発展を祈っている。